

3. 入試問題の傾向と対策

入試問題の各科目担当者が、自ら出題意図・傾向などを2019年度入試をもとにアドバイスします。じっくり読んで役立ててください。

国語

[傾向]

本学の国語の試験は、受験生諸君が基本的な読解力と基礎的な知識及び論理的な思考能力を持っているかを見るために課すもので、文学史の枝葉末節にわたる質問をしたり極めて難解な文章を特殊な方法で読み解くような問題は一切出していない。近代以降の文章について60分間で3000～5000字程度の評論・論説文を2題解いてもらうというのが基本的な形式である。読解に関する問題は、読解それ自体が論理的な思考にあとづけられて行われているかを見るもので、従ってあまり論理的でないタイプの文章は出題していない。なお、過去の問題を見てもらえば分かるように、漢字語彙の知識を問う問題がよく出題されている。これは基礎的な国語力を見るために是非とも必要だと考えているからであるが、読解に必要な範囲で日常的に出現する、常用漢字外の漢字を含む語彙を出題する場合もある。

[対策]

まず第一に論理的に文章を読む力を養うこと。新聞のコラム・論説を読む癖をつけるのが一番手っ取り早い対策である。その上で、筆者が何を言いたいのか、自分はどうかを論理的に詰めて行く習慣を身につけて行くことが必要である。そのためには、日ごろから様々な書物を読み、それについて考えるという地道な努力が最善の道である。それから漢字や語彙の学習をすること。上記のように本学の国語では漢字語彙の知識を問う出題がやや多い。国語力はすべての学力の基礎である。軽視せずに努力して欲しい。

外国語(英語)

[傾向]

本学の英語の筆記試験は、全学部・全学科で同一の60分試験である。

①は語法・文法および語彙力を問う穴埋め問題、②は語彙と構文・文法・語法の力を測る整序問題、③は長文の空所補充問題。文章の流れを読み取り、空所にいれるべき文章を解答として与えられている複数の文章から選択する。④は英文の内容について和問和答形式の読解力を測る問題、⑤は英問英答形式による読解力を測る問題である。ただし、次年度の入試では問題の形式、種類および設問数に若干の変更があるかもしれないので、入試説明会等で確認願いたい。

[対策]

本学の英語問題のいちばんの特色は、受験生がどれだけ中学・高校で学んだ基礎知識を身につけているかを測るところにある。出題される問題や長文に用いられている語彙と構文と文法項目のほとんどは中学・高校で習ってきたものである。したがって、学校で用いられた教科書を中心とした教材をしっかり復習することがとても大事なことになる。

もうひとつの特色は、出題中の語彙や慣用語句は英語の辞書で高校のうちに学習しておくべきものとして受験対策用に暗記が必須とされている語を目安としており、それ以外は原則として【注】が付くことだ。ただし、高校標準語の派生語や複合語の場合、意味が容易に推測できる場合は必ずしも【注】は付かない。例えば、ある出版社の英和辞典では、assert は* (高校標準語)、assertion は† (大学生、社会人に必要な語)、assertive は無印 (その他の語) という表示方を用いて難易を示しているが、assert の意味を知っていれば -ion や -ive の付いた語の意味は容易に推測できるからである。①は単語・熟語および文法に関する穴埋め問題、②は構文・文法および語彙力を測る整序英作文問題を昨年度同様に予定している。この部分は正確に早く解答することが後半の読解問題を落ちついて解くために重要である。③では前後の脈絡を理解し、論理的に考えて筋の通った展開を読み取る力が必要となり、④と⑤では具体的内容の理解に加え主題や概要を把握する力も要求される。

とくに④と⑤で求められる読解力は、高校教科書のような、まとまった流れのある文章をきちんとたくさん読むことによって養うことができる。日頃から英語をたくさん読んだり聴いたりして英語を身近なものにするよう心がけるといい。このように勉強することで、語彙・慣用語と構文・文法の知識を豊かにし、問題を解くのに必要な英語の文構成や論理の展開を理解できる読解力を身に付けることができるようになるだろう。

日本史

[傾向]

日本史の問題は以下の3点を重視して作成されている。

- ①政治・外交・軍事から経済や社会、教育・思想・宗教・文化に至るまで、幅広い歴史知識を総合的に問う。
- ②古代・奈良・平安・鎌倉・室町・戦国・安土桃山・江戸・明治・大正・昭和・平成に及ぶ全時代を対象に、特定の時代に偏ることなく出題する。
- ③以上の全体的な枠組みのなかで、個々の歴史的事象に関連づけられた、ある程度深い知識を求める。

出題形式では、A・B方式ともに、設問数は50問で、すべてマークシート方式であった。

[対策]

歴史の勉強では、個々の歴史的事象を理解することに加えて、時間の経過に伴う大きな流れも同時に把握することが重要である。まず、一つ一つの歴史的事象について、教科書や史料集などに記載されている用語・図表・数字などは最低限おさえておくことが必要である。とくに、教科書は図表や注記に至るまでしっかり学習してほしい。そのうえで、個々の事象の歴史的位置づけを年表などで常に確認する癖をつけることや、とりわけ特定のテーマごとに関連事項をまとめるといった学習方法を取ることが効果的である。

また、解答のヒントがリード文に含まれていることもあるので、すぐに解答に取り掛かるのではなく、リード文をしっかり読むことが大切である。

なお、日ごろから新書などの読書を通じて、歴史への関心と問題意識をもつ姿勢が望ましい。教養は豊富な知識として役立つだけでなく、論理的思考力を高め、より深い歴史の理解を助けてくれるものである。

世界史

[傾向]

「世界史」は、以下の5項目を重視して受験生の理解度を問う出題となっている。

- ①世界史の幅広い基礎知識
- ②世界史の基本的流れ
- ③各時代・地域の特徴と地域間の交流
- ④日本とその周辺地域への影響
- ⑤現代社会で発生した様々な事象との関連

難問は少なく、ほとんどは高校の教科書（世界史B）を丹念に読み込んで理解すれば、合格点の確保が十分可能な問題である。出題範囲は特定の地域や時代に限定されることなく、様々な地域・時代に及んでいる。空欄へ適切な語句等を記述させる問題が若干あるが、ほとんどはマークシートによる選択式問題である。

[対策]

受験生は、まず教科書によく目を通し、まんべんなく学習する必要がある。その際、「用語集」や「地図帳」を併用し、重要な事項については、それらの歴史的意義や内容をおさえたうえで、各事項相互の関係とともに理解しておくといよい。現代世界の動向と関連付けて出題されることもあるので、日頃からニュースにも関心を持つようにしてほしい。

政治・経済

[傾向]

「政治・経済」の出題は、大問が4題で構成されている。その領域は、大別すると①日本国憲法に関連するもの、②政治思想や政治史および現代社会の政治に関するもの、③経済理論や経済活動に関するもの、④国際社会の動向に関するものである。出題のレベルは、一部を除いて高度なものではなく、標準的な基礎知識の確認をするものが多い。その意味で、ほとんどは標準的教科書に記述されている基礎的な事項の修得を問う問題といってよい。ただし、それぞれの領域における時事的なテーマについては、資料集などに掲載されている重要事項に関しても出題されている。今日の社会において議論されているテーマについて、どれだけ関心をもっているかを問うための出題である。2019年度の試験についてみると、日本国憲法と「新しい人権」、選挙制度、日本や世界の社会保障制度、環境問題、日本国憲法と司法権、政党政治、近現代の世界経済および経済思想、貿易と国際経済、法の下での平等、地方自治、金融のしくみ、法の支配などを素材とした出題がなされている。問題形式は、空欄に適切な語句を語群の中から選択するものが半分以上を占めている。ただし、最重要語句については、記述式で解答が求められている。

[対策]

いずれの領域に関する問題も、問われているものは、基本的な事項がほとんどであるので、教科書に記述されている基礎的用語を確実に学習しておくことよい。もちろん、「用語集」に掲載されている基礎的用語の出題頻度の高い事項・人名などは要注意である。条約の名称や人名などは、正確に記述することが求められる。わが国の政治や法制度にかかわる人名・地名なども、漢字で正確に書くことが求められる。誤字やかな書きは減点または零点になる。記述式は、マークシート式よりも配点が高いので、正確に記述することができるかどうかは、評点に大きく影響する。

時事的問題も出題されるので、それぞれの出題領域に関して、いま何が問題となっているのか、日常的な関心をもって資料集などを十分に活用しておくことよいであろう。

地理

[傾向]

「地理」の問題は、高等学校における日々の学習成果に基づき、大学で人文学や社会科学を学ぶ上で最低限必要とされる地理の教養が身につけているかを見定めることを目標としている。「人間と自然にかかわる幅広い基本的知識」に加え、「日本を含む世界の諸地域における社会の成り立ちと、その基本的な地理的特質」をテーマにした問題が主体となっている。問題は、大問が4題で構成されており、解答はすべてマークシート方式である。なお、地理Aと地理Bのどちらの履修者でも受験が可能である。

2019年度の入試でも例年同様、1問目は地形図、2問目は自然地理、3問目は地誌、4問目は系統地理が出題された。3問目はA入試ではサハラ以南アフリカ、B入試ではフランスとカナダ、4問目はA入試では村落と都市、B入試では工業が中心テーマであったが、個々の設問は人文・社会・自然に広くまたがり、また時事問題も含まれているので、日頃から世界全体に偏りなく目を配り、地域の特徴や世界が直面している課題を総合的に理解しているかどうか、地図や統計を読み解く力とともに試されてくる。

[対策]

日頃から高等学校の教科書や地図帳・統計資料などを活用しながら学習し、基本的な地理的知識を身につけておくよう心がけておけば、十分に対応できる問題である。また、世界の諸地域の経済社会動向など、時事問題などもきちんと把握しておく必要がある。地図帳や教科書の中の挿図もただ漫然と眺めるだけでなく、例えばそこは世界の中のどこに当たるかをしっかりと確認しておくことが大切である。また、自然環境・人口・資源・産業などについては、統計資料を活用して基本的な特性を把握しておく必要がある。言語・宗教・産業・文化・環境問題に関しても、分布図・各種主題図やグラフをよみ、どのような地域的特性を示しているのかをとらえておかなければならない。日頃から地理的事象を、地図やグラフに描きながら整理するよう心がけておくことよいであろう。

数 学

[傾向]

出題範囲は、数学Ⅰ、数学A、数学Ⅱ、数学Bであり、範囲内からまんべんなく出題される。

「数学」の問題で意図していることは、上記出題範囲の数学が全般的に理解されているか—基本的な数学の力があるか—という点と、問題の意図を理解し数理的に組み立てて解に導いていく力があるかをみることである。

[対策]

上記の範囲の教科書を繰り返し学び、その内容、個々のテーマが意図していること—定義や考え方あるいは解法など—を自分でも誘導したり証明したりできるくらいにおさえておくことである。奇をてらった問題は出されないで、基本的な事柄を自分で他の人に説明できるくらいに十分に把握しておいてほしい。

また、教科書や参考書に見られるパターン化された問題を解くことに加え、問題として記述されている事柄が、数学的にどう表現され、どう解法に結び付けられるのか、その過程を考える力を養ってほしい。

外国語(Reading & Writing)

[傾向]

Reading & Writing の試験は、段落の展開、文章の流れを理解する Reading と、読んだ内容を英文で要約したり、与えられたトピックについて自分の考えを述べる Writing の2つの力を測る試験形式となっている。求められる英語力は、「外国語(英語)」の試験と同じく、語彙力・文法力、そして総合的な基礎力である。注についても、「外国語(英語)」と同様に、注なしで大意をつかむのに支障がないと判断される場合には注はつけない。ただし、次年度の入試では問題の形式、種類および設問数に若干の変更があるかもしれないので、入試説明会等で確認願いたい。

[対策]

①は長文について文章の流れ・前後関係を理解しないと解答しにくい空所補充問題と、内容に関する英問英答問題である。前者の問題は選択肢を間違えると内容把握問題の解答にも影響を与えかねないので、前後関係を論理的に把握する力が必要となる。後者の問題は具体的内容の理解に加え、主題や概要を把握する力が求められる。

②は複数の段落から構成される長文についての問題で、それぞれの段落の最初の文が与えられ、その文に続く残りの文章を選択するという、文章全体の展開・前後関係を理解していないと解けない問題である。

③はそれほど長くない文章が与えられ、その内容を理解したうえで、文章全体の主旨にふさわしいと考えられる書き出しの1文(トピック・センテンス)を書く問題である。英語の文章構成というのは日本語と違い、最初にトピックを表す文を配置する特徴を持っているので、ふだん文章を読む際もこのことに留意しておくとうまいだろう。

長文の内容は多岐にわたることが予想されるから、幅広いジャンルに対応できるよう種々な英文に触れて総合的な読解力を養成するよう心がけてほしい。読解力は、高校教科書のような、まとまった流れのある文章をきちんとたくさん読むことによって養うことができる。日頃から英語をたくさん読んだり聴いたりして、英語を身近なものにするよう心がけたい。このように勉強することで、語彙・慣用句と構文・文法の知識を豊かにし、問題を解くのに必要な英語の文構成や論理の展開を理解できる総合的読解力を身に付けることができるようになる。

④では身近なトピックを英文で与え、それに60語前後のまとまった文章で解答してもらう。1つの決まった正解はないが、トピックに適切に解答しているかが重要である。また、語彙を正確に使い、文法的に破綻のない文章を書くことが要求される。必ずしも複雑な構文を使う必要はないが、自・他動詞の区別、前置詞の選択、可算・不可算名詞の区別、主語と動詞の一致などの文法事項を単なる知識とせず、運用できるよう心がけてほしい。